

日本語における N-Rheme¹⁾ 書記テキストにおける具現と機能について

阿 部 聡

Abstract

This paper analyzes realizations and functions of N-Rhemes in Japanese written texts. The N-Rheme of a clause carries the most newsworthy information, which readers should pay attention to. In unmarked cases, N-Rhemes in Japanese are realized through word order; in marked cases, they are realized by *toritate*-particles, auxiliary *noda*, or focus of negation and question. As for functions, N-Rheme provides a common ground for further text progression, predicts what to follow, and indicates directions of the progression of texts.

キーワード……N-Rheme 情報構造 テキスト形成的メタ機能

1 はじめに

談話分析、文章論、機能主義言語学などにおける主題 - 題述(Theme-Rheme)分析では、これまで、英語においても、日本語においても主題の方に関心が向けられることが多く (Halliday1994:67、永野 1986 参照) 題述に関する詳細な研究は比較的少ない。たしかに、選択体系機能言語学(systemic functional linguistics、以下 SFL と略す)のテキスト形成的メタ機能(textual metafunction)では、主題は、主題と題述という2つの部分からなるメッセージとしての節(clause as message)において機能し、題述を解釈するための局所的コンテキスト・枠組みを提供することで、テキスト(text)²⁾の展開に貢献しているとされている(Fries1995, Martin et al 1997)。しかし、実際のメッセージの内容は主題だけで分析することは難しく、内容を知るには題述部分が重要となる。また、主題の機能を究明する上でも題述に注目する必要があると思われる。

ただし、Fries(1994:234)が言うように、主題以外の部分はすべて題述ということになるため、題述の範囲は主題よりも広い。この点については、日本語でも同様である。Fries(1994)は、題述の範囲を限定するために N-Rheme という用語・概念を考案している。N-Rheme は、談話の目的・到達点を明示する。本稿では、Fries が英語の書記テキスト分析のために考案したこの概念の、日本語への応用を試み、日本語における N-Rheme の具現と機能について考察する。題述の範囲を限定して分析することがどのような意味を持つのかを、テキストの目的との関連を考慮に入れつつ、明らかにしていく。

2 英語における N-Rheme

本節では、Fries(1994)によって考案された N-Rheme という概念とその関連概念を概観する。

2.1 N-Rheme とは

Fries(1994:234)は N-Rheme について次のように述べている。節頭の構成要素には「主題」という用語が用意されているのに対して、節末の構成要素を指す用語はない。題述では主題以降の部分すべてを含むため包括的すぎる。そこで、新情報(New)は、典型的な場合には、節の最後の構成要素と結び付けられることから、N-Rheme という用語を考案し、節末の構成要素を指すこととする。この N-Rheme は題述と新情報との無標(unmarked)の連合である。英語の情報構造は、基本的に音調によって表され、新情報は主音調(tonic)の際立ちによって示される。しかし、書記テキスト(written text)では音調を用いることはできないため、他の方法によって示す必要がある。情報単位(information unit)は節にほぼ一致するため、主音調の無標位置である情報単位の最後の部分、すなわち節の最後の部分に置かれた構成要素が新情報を担うと考えられている。N-Rheme は主として口語テキスト(spoken text)ではなく書記テキストにおいて問題となるのである。

Fries はさらに 'As we examine the text, we should keep in mind that the N-Rheme is the newsworthy part of the clause, that is, the part of the clause that the writer wants the reader to remember' (Fries1994:234)と述べているが、これは N-Rheme の定義だと解釈することができる。N-Rheme とは、節の中で報道価値・情報価値³⁾を持つ部分で、書き手が読み手に対して覚えておいてほしい、注意を払ってほしいと思っている部分である。Martin(1992,1993)は、節の最後の部分を minimal New と呼び、Halliday(1994:336)は、情報焦点(information focus)と呼んでいる。この部分はメッセージの要点(Point, main point)を担う。

(1) The Urban Stress Test translates complex, technical data into an easy-to-use action tool for concerned citizens, elected officials and opinion leaders. (Fries2002: 146)

英語における主題は、節の先頭によって具現され、節の最初の観念構成的(ideational)要素までが主題部分に含まれ、それ以降はすべて題述とみなされる。(1)では、節頭の'The Urban Stress Test'が主題で、それ以降('translates.....leaders')が題述となっている。そして、'into an easy-to-use action tool for concerned citizens, elected officials and opinion leaders' が N-Rheme ということになる。

以下では、Fries の新情報の解釈、N-Rheme の具現と機能について見ていく。

2.2 情報構造

Fries(2002:121)によると、情報構造には、発話を情報の単位に分割することと、分割された単

位のどちらが情報価値のある情報を担っているのかを示すことが含まれている。情報価値を持つとして示されているほうが新情報で、旧情報(Given)は、情報価値のあるものとして示されていない情報(Fries2000:93)である。

Fries の情報構造の解釈の中で、これまでの研究と異なる点は、新情報を情報価値のあるものとして提示されている情報であると捉えるところにある。これまでの研究では、旧情報は聞き手にとって復元できる情報、新情報は聞き手にとって復元できない情報という二分法が優位であった(Halliday1994:298 など)。しかし、この二分法ではテキストにおいて初出かどうかということ(Martin1992:Ch.3 の ‘ participant identification ’, ‘ presenting/presuming reference ’)と情報構造とが混同されやすかった。そこで、Fries は上のような解釈を提示しているのだが、しかし、この新解釈はHallidayによる情報構造の定義と矛盾しているわけではないことをFriesは強調している。Halliday(1994:298)も、「新情報が意味するところは、『これに注意を向けなさい、これは新しいことですよ』ということである」(山口・寛訳 2001:468 より)としている。

(2) Abe I have a newspaper and a magazine. Which would you like?

Betty I'd like the newspaper, please. (Fries2000:86)

(2)の Betty の発話では、‘ the newspaper ’ と定冠詞 the があることからこれが旧情報であると解釈されることがあるが、しかし、この対話では、「新聞と雑誌のどちらにするか」が問題となっており、それに対して「新聞が(ほしい)」と答えている部分がこの ‘ the newspaper ’ であり、したがってこれが新情報を担う部分である。

2.3 N-Rheme の具現と機能

Halliday(1994:38)は、主題は節頭に配置されることによって具現される(realized)のであって、節頭は定義ではないとし、「定義は機能的なものである」としている。本稿もこれに倣い、N-Rheme の定義を機能的な観点から試みる。これにより、「節末」というのは定義ではなく、具現(realization)の一つと見なす。

主題の機能は、上で触れたように、題述を解釈するための局所的コンテキスト、枠組みを提供することであり、また、テキストの展開の技法(method of development)を明示し、節をテキストに結び付け、テキストを首尾一貫した(coherent)ものにすることである(Fries1995、Martin1992 参照)。では、N-Rheme の機能とは一体どのようなものであろうか。Fries(2002)は、以下のように述べている。

Because of its association with New, the N-Rheme typically expresses the core of the newsworthy part of the clause, that is, the part of the clause that the writer wants the reader to remember. As a result we should expect the content of the N-Rheme to correlate with the goals of the text as a whole, the goals of the text segment within those larger goals, and the goals of the sentence and the clause as well. (Fries2002: 126)

つまり、N-Rheme の内容(content)はその性質上、テキスト全体の目的・到達点(goal)、部分テキスト(text segment)の目的・到達点、文・節の目的・到達点と関連があるのである。

Martin(1992:452)は N-Rheme の機能⁴⁾を活動領域(field)を明確に表現することとしており、また、Martin(1993:244)は、新情報(すなわちここで言う N-Rheme のこと。注4)参照)は活動領域を詳述(elaborate)し、テキストの意味を発展させる、つまり、観念構成的意味を肉付けしている。そして、この新情報を選択するパターンは、テキストの要点(Point)を構成する。Martin(1992:489)は、「要点は展開の技法の、談話上の補部(complement)である。主題がテキストを繋ぎ止めるのに対して、要点はテキストを詳述し、それを新情報として発展させる」としており、N-Rheme の機能としては、この要点を明示することであると考えられる。Halliday(1994:336)においても 'The choice of information focus [...] expresses the main point of the information unit, what it is that the speaker is presenting as news; the pattern of focus throughout the text likewise the main point of the discourse' と、情報焦点と談話(テキスト)の要点との関係について言及されている。

要するに、N-Rheme の機能は、テキストや節の要点を明示することであり、テキストの内容を詳述し、テキストの目的を果たすことである。本稿では、これを N-Rheme の定義とする。

次に具現について見ていく。Halliday(1994:336)は、書記テキストでは、情報単位は節に一致し、情報焦点は単位の最後にくる、すなわち節末にくるとしているが、「但し、語彙的結束性(例えば、繰り返される語は情報焦点にならない)によるか、文法的構造(例えば、叙述主題をもつ構造 *it is ... that ...*)によって、情報焦点が別の語彙的要素に置かれていることを積極的に合図することもできる」(山口・寛訳 2001:528 より)とも述べている。Fries は N-Rheme を題述と新情報とが無標に重なり合ったものであるとしている。要点、もしくは情報焦点の無標の具現が N-Rheme に一致するのであって、節末に配置されない場合は有標であると捉えることができよう。ただし、有標の場合を、「有標の N-Rheme」と呼ぶことができるかどうかは定かではない。叙述主題の場合、「it is ...」の部分が主題かつ情報焦点となるため、N-Rheme と呼ぶことはできない。

以上、N-Rheme の機能と具現について見てきたが、N-Rheme は、Fries(1994:240)に示されているように、N-Rheme は強調(emphasis)を表す位置として用いられ、N-Rheme に配置された内容はテキストの目的に関連している。テキストの要点、つまり読み手に最も伝えたい部分というのは、明示的であるほうが情報伝達上好ましい。この要点を明示するのが N-Rheme である。

3 日本語の情報構造

これまで見てきた N-Rheme という概念は、SFL の立場から英語のテキスト形成的メタ機能进行分析するなかから生まれたものであった。この概念を英語とは統語構造が異なる日本語に応用することはできるだろうか。日本語のテキストにおいても、読み手に最も伝えたい部分は明示

的であるはずだと考えられる。本節では、高見(1995,1998)による日本語の情報構造を検討し、N-Rheme の日本語への応用に関する仮説を提示する。

3.1 日本語の文の情報構造

高見(1995)は、久野(1978:60)の日本語の文の情報構造に関する一般化を、「日本語は、通例、動詞の位置が文末に固定されているので、動詞が旧情報を表わす場合は、その直前の情報が文中の最も新しい情報(=最も重要な情報)を表わす要素のための予約席となる」(高見 1995:221(14))と再定式化している。ここで高見が「文中の最も新しい情報」を「最も重要な情報」と言い換えているのは、以下の定義によるものである。

- (3) 焦点 = 重要度が高い情報[important information]: 話し手がある文を発話する際、聞き手がその文中のある要素の出現を予測できない(unpredictable)と話し手が見なす時、その要素はその文の焦点であり、重要度が高い情報である。言い換えれば、話し手が聞き手に特に伝達したい部分、つまり断定(assert)している部分を焦点、または重要度が高い情報と呼ぶ。(=高見 1995:136 (10))

(3)では、「話し手が聞き手に特に伝達したい部分」を焦点、重要度が高い情報としており、Friesの新情報の解釈に通じるところがある。高見は、(3)について、「動詞に強調ストレス(文強勢)を置かない場合、動詞の直前の位置が最も重要度の高い情報として解釈され」(1995:221)としており、日本語の語順も、「より重要でない情報からより重要な情報へ」という「情報の流れの原則」(高見 1995:221(15))に従っているとしている。高見(1998)は、これを英語の場合と比較して示している。

(4)

a. 英語: [s V]

より重要度が高い

b. 日本語: [s V]

|

より重要度が高い (高見 1998:131 (53))

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| (5) 太郎は、 <u>花子と東京へ行</u> った。 | (5) 太郎は、 <u>花子と東京へ行</u> かなかった。 |
| (6) 太郎は、 <u>東京へ花子と</u> 行った。 | (6) 太郎は、 <u>東京へ花子と</u> 行かなかった。 |
| (7) 太郎は、 <u>去年東京へ花子と</u> 行った。 | (7) 太郎は、 <u>去年東京へ花子と</u> 行かなかった。 |
| (8) 太郎は、 <u>花子と東京へ去年</u> 行った。 | (8) 太郎は、 <u>花子と東京へ去年</u> 行かなかった。 |

(一重下線部は題述、二重下線部は焦点部分。例文中の下線は筆者による。以下断りのない限り同様)

(5)、(6)は、観念構成的意味においては全く同じであるが、動詞の直前に配置されている要素がそれぞれ異なる。この語順の違いにより、どの要素が最も重要度の高い情報、つまり情報価値のある情報を担っているのかが表されている。このことは、(5)、(6)のように否定文にする

ことで確かめることができる。また、(7)、(8)では、「去年」という状況要素(circumstance)が付加されている。この場合は、日本語の基本語順⁵⁾に合致する(7)では、「去年」と「花子と」が焦点の候補となるが、基本語順から逸脱した(8)では、動詞の直前に置かれた「去年」のみが焦点となる。

以上から、次の仮説を立てることができる。

(9) 仮説 1：日本語の N-Rheme は、基本的に、動詞の直前の要素によって具現される。

上で見たように、高見が「動詞に強調ストレス(文強勢)を置かない場合、動詞の直前の位置が最も重要度の高い情報として解釈され」としていることから、日本語においても、新情報は、音調ではないが、強勢という音声を用いた方法でマークすることが可能だと考えられる。だが、書記テキストではこのような方法を用いることはできない。やはり、語順によって情報の重要度を明示することになるのではないだろうか。このように考えると、日本語における N-Rheme も英語と同様に書きことば、書記テキストに関わるものであると言えよう。

ところで、(9)の仮説には述語が名詞(名詞+断定辞)や形容詞の場合が含まれていない。(3)の定義に「断定(assert)している部分を焦点、または重要度が高い情報と呼ぶ」とあることから、名詞述語文、形容詞文では述語部分が、重要度が最も高い情報、すなわち N-Rheme ということになると考えられる。

(10) つまり母音については、数の少ない言語は難易度が低い。(井上文雄『日本語は生き残れるか』)

(11) どの問いも、どこか当たっているが、どっちにしても、それは生活そのものの貧しさの象徴である。

(暉峻淑子『豊かさとは何か』)

よって、(9)の仮説を以下のように修正する。

(12) 仮説 2：日本語の N-Rheme は、基本的に、動詞文の場合、動詞の直前の要素によって、名詞述語文、形容詞文の場合、述語となっている要素によって具現される。

3.2 問題点

(12)にはまだいくつかの問題点がある。一つは、述語のタイプに関することである。(12)では、動詞文では動詞の直前の要素が N-Rheme に相当し、他は述語要素そのものが N-Rheme に相当するのだが、以下のような例はどうであろうか。

(13) 私たちの体の中で複雑なシステムを維持管理するには、それらを担当する細胞や器官の間の緊密かつ円滑な連携が必要である。(平山令明『知っておきたい薬の常識』)

(14) 私は水がほしい。

(13)、(14)は形容詞文であるが、それぞれ「必要なもの」「ほしいもの」といった対象のほうが、情報価値が高いと考えられる。つまり、例文中の下線を付した部分が N-Rheme に相当すると解釈できるのである。このことから、単に述語の形式だけで区別をするのではなく、述語の意味に基づく分類が必要になると考えられる。

問題の 2 つ目として、N-Rheme の範囲が挙げられる。

- (15) a. 宇宙飛行士たちは、大統領から 電報を 送られた。
b. 宇宙飛行士たちは、電報を 大統領から 送られた。(Downing & Locke1992:252 の例文を訳したもの)

(15)では、「大統領から」と「電報を」という要素が動詞の前に現れているが、(15a)と(15b)ではこれらの語順が異なっている。これまでの仮説に基づくならば、(15a)は「電報を」、(15b)は「大統領から」が情報価値のある情報の核、つまり N-Rheme であるということになる。しかし、(15a)では、「大統領から」をも N-Rheme に含むという解釈もできる。

- (16) ところで、フランスのリシューという人は、同じ研究を イソギンチャクの毒素で 試みてみました。
(矢田純一『アレルギーの話』)

- (17) フランスのリシューという人は、イソギンチャクの毒素で 同じ研究を 試みました。

(16)では、動詞の直線の要素「イソギンチャクの毒素で」が N-Rheme に相当すると思われるが、(17)では、「イソギンチャクの毒素で 同じ研究を」というように、動詞の直前の要素に加えて、その左側にあるもう一つの要素までもが N-Rheme に含まれていると見ることができる。また、(15)-(17)も、いわゆる目的語が動詞の直前に位置せず、別の要素が動詞の直前に位置している場合、つまり基本語順から逸脱している場合であり、実際のところ、(7)-(8)の場合と同様である。

高見(1995)は、テキスト・談話の流れよりも 1 文内での情報の重要度を考察の対象としている(pp.139-141 参照)。しかし、N-Rheme の機能からも分かるように、N-Rheme は 1 文よりもむしろテキスト・談話の流れを指向している概念である。したがって、テキストにおける他の条件が N-Rheme の具現に影響を及ぼしていることも十分に想定される。つまり、N-Rheme の範囲が、テキストの流れなどにより変化する可能性があるということである。

本節では、日本語の情報構造の特徴から、日本語における N-Rheme の具現を分析した。ただし、上で述べたように、語順はあくまでも N-Rheme の具現であって、定義ではない。談話の要点を表すという機能についてもさらなる考察が必要である。

4 考察

本節では、前節での問題点についてより具体的に考察を進める。まず、具現に関する問題点に関しては、N-Rheme の範囲、有標の具現形式について考察する。そして、N-Rheme の談話における機能を取りあげる。

4.1 具現の範囲

まず、具現の範囲を取りあげる。N-Rheme の範囲については、英語の場合でも Fries(2002)と

Martin(1993)とでは立場が異なる。Fries(2002:133)では、‘ We urgently need your help ’ という文で、新情報としては節末(すなわち N-Rheme)の ‘ your help ’ だけでなく、‘ urgently need ’ までが含まれるが、N-Rheme はすべての新情報をあますところなく含む必要はないとしている。しかし、N-Rheme は少なくとも新情報の一部を含み、しかも、典型的には、そこが節の情報価値のある部分の核(Fries2002:126)なのである。これに対して、Martin(1993:247)は、節を超えたレベルにおける主題 (‘ Hyper-Theme ’) と節を超えたレベルにおける新情報 (‘ Hyper-New ’) をも考察の対象に含めようとしており、そのためには、最小限の新情報 (minimal New) ⁶⁾から、その左方にあるもう一つの観念構成的要素を含む必要があるとしている。日本語ではどちらの立場のほうが有効な説明が可能であろうか。

- (18) シイラ科の魚は、体が細長く 側扁している。 前額部は隆起し ほとんど垂直であり、背びれ・しりびれの基底はきわめて長い。 両あごには櫛状をした歯があり、大部分のものは口蓋骨と咽頭骨にも歯がある。 うきぶくろはない。(中村幸昭『マグロは時速 160 キロで泳ぐ』文番号は筆者による。以下同様。)

(18)で下線を付した部分は N-Rheme が具現されている (と解釈した) 部分である。ここではをとりあげる。 の「両あごには櫛状をした歯があり」では、仮説通り、動詞の直前の要素が N-Rheme である。それに対して、後半の「大部分のものは口蓋骨と咽頭骨にも」の部分が N-Rheme となっており、動詞の直前ではない。これには2つの要因が考えられる。一つは、「歯がある」というのは直前の節 (の前半) に示されており、後半でもほぼ同じ形で繰り返されていることによる。すなわち、語彙的結束性(lexical cohesion)によって情報焦点が別の要素に置かれていることを積極的に合図している場合 (Halliday1994:336) で、有標の情報焦点 (Gómez-Gonzalez2001:178)となっている場合である。 では、N-Rheme の範囲が拡大したというわけではなく、後半の「歯が」の部分よりも「口蓋骨と咽頭骨にも」の部分に情報価値があることが語彙的結束性によって示されているので、N-Rheme の有標の具現ということになる。もう一つは、「も」というとりたて詞による。これは、4.2.2 でとりあげる。

- (19) 札幌市のように、夜間救急への体制が一応は確立されている地域はまだいいほうで、夜になったらどこへいったらよいか途方にくれる地域が、まだかなり残されているのが現状である。(柳瀬義男『大学病院の掟』)

(19)の後半は「現状では、夜になったらどこへいったらよいか途方にくれる地域が、まだかなり残されている」と言い換えることができる。このため、野田(1996:第10章)は、「現状だ」の部分「暗示的な主題」と呼び、「～のが」の部分は「伝えたいこと」となる。たしかに、「～のが」の部分は読み手に伝えたい情報である。しかし、ここで最も重要なのは「(それが)現状である (こと)」を伝えることなのではないだろうか。このように考えると、「現状である」の部分 N-Rheme であると言えよう。では、次のような場合はどうであろうか。

- (20) つまり、私たちの細胞のすべての元はマクロファージなのである。

マクロファージ時代の貪食能を強調したのが顆粒球、接着分子を多様化し異物確認能力（免疫機能）を高めたのがリンパ球、傷をふさぐ性質に磨きをかけたのが血小板、酸素を運ぶのに情熱をかけたのが赤血球、組織を修復するように進化したのが線維細胞、収縮する細胞内骨格を発達させたのが筋細胞、血球の入れ物になったのが体腔上皮や血管内皮細胞なのである。（安保徹『医療が病いをつくる』）

(20)では、 の内容をより具体的に拡充しているのが である。この では「A のが B だ」という形式で並列されている。つまり、「私たちの細胞のすべて」を列挙し、その「元」が「マクロファージ」であることを示しているのである。この「A のが B だ」の「B だ」は名詞述語文であり、仮説ではこの部分が N-Rheme となる。しかし、野田の説を考慮に入れるならば、「A のが」の部分「伝えたいこと」であり、意味上は N-Rheme とほぼ一致する。では、「A のが」の部分までも N-Rheme に含むことは可能だろうか。天野(1998:69-70)は、「A が B だ」という名詞述語文には前項焦点文（「A が」が焦点）、後項焦点文（「B だ」が焦点）、全体焦点文（「A が B だ」の全体が焦点）の 3 つがあるとしている。というのも、「は」が「『は』の前は前提句、その後が焦点句」であることをマークするのに対して、「が」にはそれに対応する機能がないと考えるからである（天野 1998:79）。全体焦点文とは、たとえば以下のようなものである。

(21) 丈夫な品種がたくさんある。とくにおすすめなのがこれだ。（=天野 1998:70(13) 下線は著者によるもの）

(20)では、 は、先行文脈、すなわち にその前提を依存しており、 全体がその前提に対する焦点として機能している、と考えることができる。したがって、この場合は、 は、「B だ」だけではなく、「A のが B だ」全体が N-Rheme であるということになる。

天野(1998:79)は「『は』文は、『は』が主題表示機能を持つために、主題、前提の解釈を、その文だけで独立で行うことが可能である 文として、『が』は主題表示機能を持たないことから、間接的に「が」文は 主題、前提の解釈を、先行文脈や状況に依存して行わなければならない 文として機能する」と述べている。このことから、日本語における無題文（「は」などによる主題の明示がなされていない文）については、N-Rheme の解釈は文脈や状況といったコンテキストに依存すると言える。ただし、天野の考察対象は名詞述語文であるため、このことが動詞文などにそのまま当てはまるわけではない。

(22) 戦後補償の問題を考えるに当たって、まず、その前提として、一五年の長きにわたったアジア・太平洋での戦争が、どのような経過をたどり、いかなる歴史的意味をもつものであったのかをふり返
ってみよう。（内田雅敏『「戦後補償」を考える』）

(22)は、章の冒頭部分である。この文は、主題に当たる要素がないため、無題文ということになる。この無題文のなかで焦点もしくは N-Rheme の具現の範囲を捉えるには、章の冒頭部分であることから前提を求めるためのコンテキストが十分ではない。しかし、下線を付した部分が N-Rheme であると考えることができる。(21)を以下のように語順を入れ替えてみる。

- (23) 戦後補償の問題を考えるに当たって、まず、一五年の長きにわたったアジア・太平洋での戦争が、どのような経過をたどり、いかなる歴史的意味をもつものであったのかを、その前提としてふり返ってみよう。

(23)では、(22)とは異なり、動詞の直前の「その前提として」の部分が最も情報価値の高い部分であると思われる。動詞文の場合は、名詞述語文に比べて、コンテキストへの依存性は低いと思われる。そして、(22)、(23)からは、N-Rheme の範囲は動詞の直前の要素であると考えられる。

さて、前節で見た「必要だ」などが述語の形容詞文の場合はどうであろうか。

- (24) インドの某観光地では日本人が善意で子どもたちに日本語を教えたが、その子たちが成長して、集団で観光客相手に悪用しているといううわさがある。単にことばを教えるだけでなく、経済的・道義的なアフターケアも必要なのだ。(井上史雄『日本語は生き残れるか』)

「必要だ」などの形容詞は、益岡(1987:88-91)が示しているように、項をとる述語である。つまり、(24)では、「必要だ」は、「経済的・道義的なアフターケアも」を項として要求する 1 項述語だということである。

- (25) a. 太郎は正直だ。(0 項述語)
b. 花子は歴史に詳しい。(1 項述語) (= 益岡 1987: 89(23))

このように項をとる形容詞は、述語部分ではなく項が N-Rheme となりやすい。

以上をまとめると、日本語の N-Rheme の具現の範囲は、基本的には、動詞文では、動詞の直前の要素、項をとる形容詞文では、形容詞の直前の要素、項をとらない形容詞文では、形容詞そのもの、名詞述語文では、前項(述語の直前)、後項(述語そのもの)、全体(「A が B だ」の全体)である。ただし、コンテキストや語彙的結束性などにより前提が示されている場合には、具現の位置が移動することがある。

4.2 有標の具現形式

4.2.1 否定と疑問

高見(1995:224)は以下のような例文を示し、「否定や疑問の焦点は、文中で最も重要度の高い情報を伝達する要素であるため、このような事実からも、動詞の直前の要素が文中で最も重要度の高い情報を伝達すると結論付けられる」と述べている。

- (26) a. 太郎は、花子と奈良へ去年行かなかった。
b. 太郎は、花子と奈良へ去年行きましたか。
(27) a. 太郎は、花子と去年奈良へ行かなかった。
b. 太郎は、花子と去年奈良へ行きましたか。
(28) a. 太郎は、去年奈良へ花子と行かなかった。
b. 太郎は、去年奈良へ花子と行きましたか。(=高見 1995:224 (23)-(25))

まず、否定の場合を見ていく。否定の焦点が動詞の直前とは言い難い例がある。

(29) 彼はまだそのステーキを食べ終えていない。

この「まだ」のような副詞は、否定の焦点であると考えられるが、動詞の直前には位置していない。このような場合を有標(marked)の具現として捉えることとする。

次に、疑問の場合をとりあげる。たしかに高見が示している上の例では、疑問の焦点は動詞の直前の要素にあると解釈できる。しかし、疑問詞が現れている場合はどうであろうか。

(30) いつ彼は花子と結婚しましたか。

(31) どこでその財布を拾ったのか。

(32) 考えてもみるがいい。一体どのだれが見ず知らずの者に、何の見返りも期待せずに金を渡し
たり、飲み食いさせるであろうか。(柳瀬義男『大学病院の掟』)

疑問詞は、聞き手が情報を要求する疑問文の中で、最も聞きたい部分である。これが、(32)のように、いわゆる反語的疑問文になると、この疑問詞の部分が読み手に最も注意を払ってほしい情報、すなわち N-Rheme となる。疑問詞の場合、その形式によって情報価値の高さが示されるため、語順に拠らなくてもよいと考えられる。これも N-Rheme の有標の具現形式である。

4.2.2 とりたて

とりたてとは、「暗示される他の事柄との対比・関係のもとに、当の文の表している事柄を述べること」であり、「明示された情報と暗示された情報との関連付けであることによって、とりたては、情報通達機能のレベルに深く関係している文法カテゴリー」である(仁田 1995:37)。とりたては、主としてとりたて詞によって表される。とりたて詞は、文の命題的意味、観念構成的意味に影響を及ぼさないものである。

(33) 父親や母親はもちろん、まだ幼い太郎まで朝から晩まで働いた。(沼田 2000:164 (31a)を一部改変)

(34) まだ幼い太郎が朝から晩まで働いた(コト)

Matthiessen(1992)は、テキスト形成的メタ機能を具現するために用いられる語彙・文法的資源は、観念構成的メタ機能、対人的メタ機能によって使用されていない資源を用いるとしている。とりたて詞は、観念構成的メタ機能によっても使用されておらず、また、モダリティなどに関わる対人的メタ機能によっても使用されていないと考えられる。この点では、仁田が言うように「情報通達機能」のレベルに深く関係していると言えよう。とりたてはテキスト形成的メタ機能に関わると考えられるということである。

とりたてにはフォーカス(焦点)がある。沼田(2000:164)によると、とりたてのフォーカスとは、とりたて詞がとりたてているものである。(33)で言えば、「まで」によってとりたてられている「(まだ幼い)太郎」がとりたてのフォーカスである。たしかに、「朝から晩まで」という動詞の直前の要素にも情報価値を認めることができるが、とりたてられている要素のほうが要点、強調したい部分であろう。このとりたてのフォーカスには次の3種類がある。

(35) a. 直前フォーカス(とりたて詞の直前、あるいは格助詞を介して直前の要素がフォーカスとなる)

b. 後方フォーカス (文中の名詞句などに後接するとりたて詞が、その名詞句から述語までの範囲つまり述語句をフォーカスとするもの)

c. 前方移動フォーカス (とりたて詞が述語に後接するにもかかわらず、述語とは離れて、フォーカスはその述語と共起する前方の名詞句などであるもの) (沼田 2000: 165-168 を再構成)

このように、とりたてによって焦点があらわされるため、主題 - 題述構造、情報構造、結束性というテキスト形成的メタ機能の 3 つの分類のうち、とりたては、情報構造に関わると考えられる。

(36) このようにして、一応、検定基準は改定されたが、そもそもいろいろな角度から論じられなければならない教科書の記述について、国家が一定の見解、それも誤った見解を押しつけようとする検定制度にこそ問題がある。(内田雅敏『「戦後補償」を考える』)

(36)は、最後の述語が「問題がある」となっていて、存在を表す動詞文となっている。通常であれば、「問題が」が N-Rheme となる。しかし、その前に「～とする検定制度にこそ」とあるため、こちらに焦点が移動している。つまり、要点がとりたて詞によって明示されているのであり、こちらが N-Rheme だということになる。

(37) デカルトの「思惟する精神」までさかのぼらなくても、その人の性格や行動を決めているのは脳であると思っている人が多いのではない。また、最近の分子遺伝学で揉まれた人たちは、その人の性格や行動も遺伝子に組み込まれているというかもしれない。しかし、別の見方も必要である。(安保徹『医療が病いをつくる』)

実際、とりたて詞による N-Rheme が無標の具現、つまり動詞の直前位置などに現れることもある。(37)の「別の見方が必要である」としても、とりたてによる暗示的意味が失われる以外には、意味の変化はない。しかし、(36)のようにとりたて詞によって N-Rheme が明示されている場合、語順に関係なく N-Rheme として機能する。

4.2.3 「のだ」

野田(1997)は、スコープの「の(だ)」による、文のフォーカス位置について考察している。スコープの「の(だ)」とは以下のようなものである。

(38) [悲しいから泣いた] のではない。(野田 1997:33 (3)を一部改変)

括弧で示したのが「ない」という否定のスコープであり、二重下線部が否定のフォーカスである。これを「悲しいから泣かなかった」とすると、否定のフォーカスは「泣く」という動詞の語幹となる。

(39) 次郎は、お腹がすいていたからそのパンを食べたのではない。

同様に考えると、(39)でも、二重下線部が否定のフォーカスとなる。通常の N-Rheme の具現位置にある「そのパンを」はフォーカスとなっていない。このスコープの「の(だ)」によってフォーカスが移動することがある。これは、Halliday(1994:336)が言う、文法的構造によって情報焦点が無標位置ではなく、別の要素にあることを示している場合に当てはまる。

以上、有標の具現について見てきたが、具現が有標であっても、文やテキストの要点を明示している。この点では無標の場合と全く変わらない。また、テキストの目的との関連についても同様であると考えられる。

4.2.4 「が」

本稿では、格助詞「が」を、N-Rheme の有標の具現形式、N-Rheme を表すマーカーとしては見なさない。だが一方で、「が」を新情報のマーカーであるとする説がある。「が」を新情報のマーカーだと見なす立場をとる論考には、Hori(1997)、Nanri(2001)などがある。ここでは、Hori(1997:319-323)を取りあげる。

Hori(1997:320)は、「腰が痛い」という節(文)を、明示された主題を欠いた、題述のみからなる節であるとし、「腰が」の部分を中心、新情報の頂点であるとしている。ここまでは、本稿における N-Rheme の解釈と一致している。しかし、Hori は「が」について、‘ this particle functions as the marker of the focus ’ であると述べ、‘ focus ’ や ‘ newness ’ といった特徴は、他の「名詞(群)+が」という構造をとる要素についてもあてはまるとしている。さらに、‘ no matter where it is placed in a clause, it makes the preceding NG[=nominal group] stand out ’ (p.321)とも述べていることから、「が」は節における位置、つまり語順とは無関係に新情報の頂点を表す、という立場をとっていると捉えてよいだろう。要するに、「が」は N-Rheme のマーカーである、という立場であると言い換えることができる。

これに対して、「が」はあくまでも格関係、すなわち命題の意味、観念構成的意味を表すものであって、新情報を積極的にマークする機能は持たないとする説がある。これには柴谷(1990)、天野(1998)、フィアラ(2000)などがある。フィアラ(2000:103)は、「助詞『ガ』は、積極的な意義における焦点化の記号ではなく、成分の『主題性』を否定する機能を託され、焦点化を消極的に暗示している」と述べている。ガ格を表示しているということは、「は」による主題化を受けていないことを表している。ということは、ガ格のままであることは、それが題述部分に含まれることを意味するのである。

Matthiessen(1992:45)は、英語の場合、観念構成的意味は語順によっては具現されないとしている。語順によって観念構成的意味に違いが生ずることはないということである。観念構成的メタ機能の具現に用いられていない語順は、テキスト形成的メタ機能の具現に用いることができる。日本語でも、格助詞によってそれぞれの要素の観念構成的意味が具現されているため、述語以外の要素の語順を変えても観念構成的意味に変化は生じない。たしかに自然な語順というものはあるものの、語順はテキスト形成的メタ機能の具現、つまり N-Rheme の具現として用いられていると考えることができる。

以上のことから、本稿でも格助詞「が」は、新情報のマーカー、N-Rheme のマーカーではないとする。

4.3 テキストにおける機能

ここでは、実際の書記テキストにおける N-Rheme の機能を考察する。主題を太字で、N-Rheme を下線で示す。

(40) 世界のことばには、 そもそものしくみから いて、 やさしいことばと 難しいことばがある。

言語の難易度 というのは、大学の難易度 についての受験生と同じ発想である。 [中略] しかし、大学の難易度は受験産業によってきちんと計算され、受験雑誌や週刊誌に載るし、ホームページなどでも公開されている。 ことばの難易度も、 公開はされていないが、一応は計算できる。 習得のたやすい言語もあるし、 なかなか使いこなせず、身に付かない言語もある。 発音や文法、単語が覚えやすくして使いやすいのが難易度の低い言語で、 覚えにくく、使いこなしにくいのが難易度の高い言語である。 日本語は、 結論からいうと、全体としての難易度は高いが、敬語と文字を除けば難易度は中位である。 (井上史雄『日本語は生き残れるか』)

(40) の N-Rheme「やさしいことばと難しいことば」がある種の話題(Topic)を導入している。この部分が、この文でもっとも情報価値が高く、読み手はこの部分に関心を払う。そして、この N-Rheme の情報についてテキストは展開していく。これが、「言語の難易度というのは」、「ことばの難易度も」⁷⁾というように主題として引き継がれ、さらに情報価値の高い情報が付加され、観念構成的意味が肉付けされていく。Fries(2000:94)は、口語テキストで、既に聞き手の知識の中に存在する要素を新情報とする理由として、さらなる交換(会話)の進展のための共通基盤を築くためだと述べている。これは、書記テキストの場合にも当てはまるのではないだろうか。つまり、この N-Rheme は、それ以降のテキストの進展の共通基盤となっているのである。

(41) そうした概念のはたらきは、 次の二つに 区別できるでしょう。 ひとつは、 今までは一緒に くくられていたことがらを、 新しい概念によって区別し、その違いを示すことで新しい現象に光を当てると いう効果 です。 [中略] それに対し、第二の働きは、 区別することとは反対に、それまでばらばらだったことがらに、 新しい共通性を見つけてくくりなおすということです。 (荻谷剛彦『知的複眼思考法』)

(41) の N-Rheme は具体的な意味内容が希薄である。これは、むしろ、テキストの進展・展開を明示し、それに注目させるためのもので、観念構成的意味よりもテキスト形成的意味に傾いたものであると言えるだろう。

(42) 自律神経系は白血球を支配しているが、 しかしその関係は 一方通行ではない。 白血球の分布自体も、 自律神経のレベルに強く影響を与えているのである。 二つの例を挙げて この法則を 実感してもらおうことにしよう。 (安保徹『医療が病いをつくる』)

(42) は、「二つの例を」がテキスト形成的意味に傾いた N-Rheme で、その後の「この法則を」は、より意味内容のある N-Rheme である。2つのタイプが並立している例である。

- (43) 教授達は、一本釣りを始めていた。 ストをやめたそうにしている学生を呼び止めて、こうさ
さやくのである。 「今、講義に出てくれば、君だけは卒業させてあげるからネ」(柳瀬義男『大
 学病院の掟』)

(43)では、N-Rheme と名詞化(nominalization)について見ていく。 の N-Rheme 「一本釣りを」は「誰か(教授達)が、誰か(学生)を、狙いを定めて自分のものにする」というような節を名詞化したものである。この名詞化としての N-Rheme は、これだけでは意味が分からない。名詞化の意味は、その後のテキストが進展するにつれて分かる。要するに、テキストの展開の方向性を N-Rheme によって合図しているのである。

以上、N-Rheme のテキストにおける機能として、()テキストの展開の基盤を築くこと、()テキストの展開を予告すること、()名詞化を伴い、テキスト展開の方向性を合図すること、の3点を挙げることができる。これらは、すべて、N-Rheme の機能である、要点を提示すること、つまりテキストの目的を果たすことにむすびつくものである。

5 おわりに

本稿では、日本語の書記テキストにおける N-Rheme の具現と機能を考察した。具現に関しては、無標の場合、動詞などの直前の要素、もしくは名詞述語文、形容詞文の述語部分によって具現される。これは、語順によるものである。有標の場合には、語彙的結束性や文脈による前提が関わる場合、とりたて詞による場合、スコープの「の(だ)」による場合がある。

テキスト上の機能としては、N-Rheme は読み手が関心を払うべき情報であることから、テキストの展開の基盤を築き、テキストの展開の予告をし、テキストの展開の方向性を合図することが挙げられる。題述ではなく、より範囲を狭めた N-Rheme として分析することにより、談話の流れをより明らかにすることができる。

さらに、語順による定義ではなく、機能による定義を用いることにより、有標の具現形式も自然に、統一的に説明することができる。

本稿では、動詞が新情報を表す場合の条件や、前提・焦点構造、Martin(1992,1993)の 'Hyper-New' などについては十分に考察することができなかった。また、ジャンルによって機能の違いが現れる可能性もある。これらについては今後の課題としたい。

<注>

- 1) 管見の限りでは、N-Rheme の定訳が見当たらないため、本稿では英語表記のままとする。
- 2) 本稿では、書きことばのテキスト、話しことばのテキストの両方を「テキスト」と呼ぶこととする。
- 3) ここで 'newsworthy' を「情報価値のある」としたが、Firbas の Communicative Dynamism における 'information value' と同義であるという訳ではない。
- 4) ここでは、Martin は新情報(New)と表記しているが、最小限の新情報の領域を考察しており、これが

N-Rheme に一致するため、便宜上 ‘ N-Rheme の機能 ’ とした。

- 5) 日本語の基本語順は、北原(1981)、南(1993)による。南(1993)が示している、述部以外の語順は、「呼びかけその他>陳述副詞(一部)>～ハ>時修飾語>場所修飾語>～ガ(>～カラ)>～二、～ト>～ヲ>ようす・程度。量」とまとめることができる(「～カラ」は動詞述語文、擬似名詞述語文の場合のみ)。ただし、こうした基本語順は、SFL のように 3 つのメタ機能(観念構成的、対人的、テキスト形成的)に分けて分析したものではなく、同一平面上にまとめられたものである。たとえ 1 文ずつ、コンテキストから取り出された文を分析した場合であっても、基本語順を決定する要因、語順の自然さを判断する基準には、テキスト形成的な要因が介在していると思われる。
- 6) これは N-Rheme に一致する。
- 7) 助詞は「も」となっているが、「大学の難易度は」と対等であると解釈できるため、主題とみなす。

< 例文出典 >

安保徹(2001)『医療が病いを作る』岩波書店。 井上史雄(2001)『日本語は生き残れるか』PHP 新書。
内田雅敏(1994)『戦後補償』を考える』講談社現代新書。 荻谷剛彦(2002)『知的複眼思考法』講談社。
暉峻淑子(1989)『「豊かさ」とは何か』岩波新書。 中村幸昭(1996)『マグロは時速 160 キロで泳ぐ』PHP。
平山令明(2000)『知っておきたい薬の知識』講談社現代新書。 矢田純一(1985)『アレルギーの話』岩波新書。
柳瀬義男(1997)『大学病院の掟』講談社

< 参考文献 >

- 天野みどり (1998)「『前提・焦点』構造からみた『は』と『が』の機能」『日本語科学』3.pp.67-85.
- 北原保雄 (1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店。
- 工藤真由美 (2000)「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子著、仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店. pp.95-150.
- 久野 暉 (1978)『談話の文法』大修館書店。
- 柴谷方良 (1990)「助詞の意味と機能について 『は』と『が』を中心に」国広哲弥教授退官記念論文集編集委員会編『文法と意味の間』くろしお出版.pp.281-301.
- 高見健一 (1995)『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版。
- (1998)「第 部 情報構造と伝達機能 省略、後置文、数量詞遊離」中右実編、神尾昭雄・高見健一著『日英語比較選書 2 談話と情報構造』研究社出版. pp.113-203.
- 永野賢 (1986)『文章論総説』朝倉書店。
- 仁田義雄 (1995)「日本語文法概説(単文編)」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版. pp.1-39.
- 沼田善子 (2000)「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子著、仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店. pp.154-216.
- 野田尚史 (1996)『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版。
- 野田春美 (1997)『日本語研究叢書 9 「の(だ)」の機能』くろしお出版。
- 野村真木夫 (2000)『日本語のテキスト 関係・効果・様相』ひつじ書房。

フィアラ、カレル (2000) 『日本語の情報構造と統語構造』 ひつじ書房。

益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版。

南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店。

Downing, A. & P. Locke (1992) *A University Course in English Grammar*. London: Routledge.

Fries, P.H. (1994) "On Theme, Rheme and discourse goals," in M. Coulthard (ed.) *Advances in Written Text Analysis*. London: Routledge. pp.229-249.

(1995) "Themes, Methods of Development, and Texts," in Hasan, R & P.H. Fries (eds.) *On Subject and Theme A Discourse Functional Perspective*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins. pp.317-359.

(2000) "Issues in modelling the textual metafunction," in Scott, M. & G. Thompson (eds.) *Patterns of Text*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins. pp.83-107.

(2002) "The Flow of Information in a Written English Text," in Fries, P.H. , M. Cummings, D. Lockwood, & W. Spiriuell (eds.) *Relations and Functions within and around Language*. London/New York: Continuum. pp.117-155.

Gómez-González, M.A. (2001) *The Theme-Topic Interface: evidence from English*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins.

Halliday, M.A.K (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd edition*. London: Arnold.(山口登・笈壽雄訳 2001 『機能文法概説』 くろしお出版)。

Hori, M. (1997) 'Mental process clause in Japanese' in Simon-Vandenberg, A-M. , K. Davidse & D. Noël(eds.) *Reconnecting Language*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins. pp.297-327.

Martin, J.R. (1992) *English Text*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins.

(1993) "Life as a Noun: Arresting the Universe in Science and Humanities," in M.A.K. Halliday & J.R. Martin(eds.) *Writing Science: Literacy and Discursive Power*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.pp.221-267.

, C. Matthiessen and C. Painter (1997) *Working with Functional Grammar*. London: Arnold.

Matthiessen, C.M.I.M. (1992) "Interpreting the textual metafunction," in M.Davies & L. Ravelli (eds.) *Advances in Systemic Linguistics : Recent Theory and Practice*. London: Pinter. pp.37-81.

Nanri, K.(2001) "Logical structures of Japanese texts," in *Text* 21. pp.373-409.

主指導教員 (大石強教授) 副指導教員 (船城俊太郎教授・山内志朗教授)